

広島俳句倶楽部

令和二年六月作品集

利尻富士

敬子

七年前、古稀を迎え、主人と北海道の北端の利尻、礼文島への旅に出た。六月の中旬であつたが、晴天に恵まれた。稚内から船で利尻島へ渡つた。紺碧の海に利尻富士が現われた時は、感動した。この度、私の手帳に書き留めていた句を発表できて嬉しく思う。今も、船から見た眼前に迫る利尻富士が、ありありと蘇ってくるのである。

流水が間近に浮かび稚内

紺碧の海に雪解の利尻富士

玫瑰や宗谷の風の吹き上ぐる

霧深き岩に海猫卵抱く

そそり立つ岩に萱草咲きにけり

夏の海凜々しく利尻富士聳ゆ

夏入日海に残照伸びるたり

海猫の大夕焼へ消えにけり

夏霞サハリン望む丘に立ち

万緑や海へ裾引く利尻岳

黄蝶のふたつ離れて飛びにけり

つばくらの飛びたる橋を渡りけり

五月来て名の知らぬ花咲きにけり

本堂の下に見てゐる杜若

夕闇にまぎれてしまひ杜若

夏の蝶榎の上を飛びにけり

石楠花にもうすぐ暮るる風が吹く

木ささげの花のまた散る朝曇

青景山ときを忘れて見てゐたり

人の影築場に立てばとんび来る

母念に手を洗ひたる薄暑かな

雲低く流れてゐたる栗の花

遠投のキャッチボールや風薫る

万緑の中へ来てゐる献血車

枇杷の実に乗つて目白の啄めり

見てをればゆつくり沈む金魚かな

この町に今年も咲けり夾竹桃

坂上る人の背照らす夏の月

庭に咲く梅花空木や月涼し

話し声聞きをるやうな玄葵

ほととぎすはかに声なき雑木山

湖の鯉に餌やる白日傘

小指ほどの穴はつはつと夏の浜

未央柳素顔のままでひと日過ぎ

金魚玉陶工房に吊るしたる

水神の塩盛る皿に青蛙

風鈴を吊つて川舟下りをり

くねくねと穴へ入る蛇雨上がり

露の葉の茂つてゐたる一里塚

百足虫踏み痛みのつづく雨の夜

佐保光俊

村上正人

あざみ

長々とインコのしやべる麦の秋

初夏のインコの羽を切り揃へ

さらさらのカレー混ぜたる夏の夕

景桜や子の逞しきふくらばぎ

新聞を開きたる音冷奴

夏の星コルク抜きたる音のして

制服の白シャツの衿整へる

玄関の向日葵を見て出かけたる

短夜や腕立て伏せを数へたる

てきばきと素麺冷す男の子

父母の墓に松蟬鳴きにけり

田水張り棚田に霧の流れけり

雨しとど早苗は水に浸かりたる

青嵐舫ひ舟より鴉とぶ

教会の泰山木の咲きにけり

高層の川面に映り風薫る

花うづぎ橋の袂に咲きにけり

対岸はニセアカシアの花盛り

女神の像とふ白薔薇の咲いてをり

里の灯の一つつつ点く夏の暁

鶯の滾る瀬音に紛れたる

山深く拓きし畑や杜鵑

峡深く泰山木の咲きにけり

蟻の列にはかの雨に乱れたり

夜もすがら雨音のする梅雨の入り

雨あとの背戸山に蟹出てをりぬ

夏柑や城下にいくつ鍵曲

乳母車止めて樗の花の下

夏の日の橋に日蝕待ちたるたり

風鈴の音に覚めたる夜中かな

亜矢

敬子

暁子

初夏の庭ていねいに掃かれたる

枝高く一輪の余花咲いてをり

昼過ぎの著莪の花へと日の差せる

景桜の夕風ふいに止みにけり

時鳥やうやう空の白みくる

ふる里の海の風来る夏座敷

新茶汲む窓に櫂の景の揺れて

走り梅雨眠りたいだけ眠りけり

さくらんぼ今日一日の終りたる

石段を上り見てゐる夕焼かな

高尾ひとみ

母が家の朝の裏山囀れり

大木を覆ひ尽くせり山の藤

長靴で泥に入るとき蝌蚪うごく

蝌蚪群るる田んぼを母の見てゐたる

春の風ふるさとへ母帰りけり

鼓草四本足の杖をつき

花桐や向うの田には水張られ

食卓に生けし芍薬咲きにけり

伽羅路を母は炭火で煮つめをり

新緑の山腹に道づくりをり

ちどり

休校の鋸を挽く子に薄暑光

渥原に点々と咲き杜若

戦いでせせらぎに竹散りにけり

傘の音激しさを増す緑雨かな

林道に水の溢れて半夏生

日の落ちて頻りに鳴ける時鳥

湯上りの髪拭きをれば時鳥

すぐ下の家に来てゐる夏燕

稜線の烟りたちまち白雨くる

高低の青竹の筒冷酒汲む

松本恵和

岩肌を打つ波の音夏初め

カーテンの揺れる書斎や夏来たる

寺の門くぐった先の白牡丹

金雀枝の墓の傍にも咲いてをり

山寺の若葉に鐘を撞きにけり

鉢植の紫陽花日ごと濃くなりて

茉莉花の夜通し香る角の家

蓮の葉のゆらりと揺れて風の吹く

ひと雨に粟の咲く香の強くなり

青葉山飛行機雲の筋二本

美耶

川岸のランナーに五月来たりけり

著莢咲いて父居りし日と思ひをり

青葉風郊外行きバスに乗り

朝ごとに風の吹きけり燕子花

朝風の緋の牡丹となりけり

黄の牡丹靡るるを見し母の庭

いつまでも日の落ちぬまま夏柳

青東風に向け玄關を開けておく

山を見て雨を眺めて夏座敷

桑門わかこ

ひと駅を歩いて余花を眺めたる

石に影して咲きはじむ白牡丹

本葎の石垣の先平家村

桐の花小溝の堰の水溢れ

峽の風麦の穂先に吹きにけり

風匂ふ夏の林に迷ひたる

ひと束の葉足し鯉焼きにけり

信子の柱の影に涼みたる

大橋博子

潮入川もぐりては浮く春の鴨

初夏や建て替へられし山の駅

小判草ボストの前に景書読み

一つ根につながり咲ける赤草

シヨパン聴く開けし窓には夏の月

夏帽子振りて同級生の来る

音高く大海原の揚花火

夏の雨ますます伸びる薔薇の枝

十薬をひと握りして散歩せり

医通ひに夏至の日差のまともなり

夕風や憑かれしごとく手を洗ふ

開け放つ三和土にくゆる蚊遣香

通されて水の音聞く夏座敷

傷き水を囲む石組苔咲いて

山肌の深く濃くなる五月かな

青鷺の流れの底に影落とす

河鹿鳴く清流の上列車過ぐ

川面より螢の飛べる宴かな

朝の日に常磐木落葉掃き寄する

コンテナの色のさまざま炎天下

冷房の通勤電車しづかなり

阿姫

白神陽子

新庄憲彦

AMのラジオのとなり梅雨きのこ
紫陽花は褪せたデニムの色になり
カタツムリ二匹離れたブロック塀
雨に濡れメダカに餌をやる背中
崖に消えまた浮き上がる黒揚羽
真つ黒な玄関に満つ菫の香
今時分制服を干す火取虫

ふじ女

通勤の夫を見送り袋掛
海峡に汽笛を交し夏の霧
霧吹きに明るさを増す螢かな
バス停の置き傘を借り梅雨最中
電話して「甚平でええ出てこんか」
あがりたる雨の瓦に光る夏至
遠雷を夜業のビルに聞いてをり

森口良樹

雨のなか白きあやめの清々し
卯の花の咲き乱れたる田舎道
ほとどぎす夜の静寂に鳴きにけり
贈られし紫陽花今年も咲きにけり
見上げれば薄紅の夏の月
どくだみの固まつて咲く庭の隅

大畑恵

鉄線の紫を置く障子かな

寄り道し泰山木の花を見る

雛罌粟の咲き放題や風にゆれ

入梅を知らせる防災無線かな

南天の花の塀より高きこと

草取に追はれる日々や山の寺

紀英子

つばくらめ太極拳の人へ飛ぶ

茶を摘める様子をドローン撮影す

もつれつ草の中から螢飛ぶ

そこに群れて咲きたる姫女苑

駄菓子屋の氷菓の旗のひるがへる

軒下に妣の風鈴吊りにけり

友岡葉山子

指先を染めて桑の実持つてくる

花令歡の地に散りたるを見て仰ぐ

夏の蝶舞ひ戻りては蜜を吸ふ

朝焼の雲あかあかと広がりぬ

花あやめ母の面影重ねけり

卯の花の匂うてきたり朝の風

穂高

百合の花リハビリを終へ身の軽く

静かなる雨のナイター始まりぬ

うちの父ビールを飲んで赤ら顔

老犬の口がハアハア夏の昼

昼下り涼しい風が入る家

阿波久

人影のまばらな道に薔薇匂ふ

重なれる葉の中に見ゆ花石榴

石榴花を眺めてゐる妻と居り

子の声の響くプールに泳ぎたる

せせらぎに夏蝶二匹舞ひにけり

井藤希

干されたる釣竿を這ふ蝸牛

県境へ一筋の道大夕焼

背負ひるる孫の持ちたる捕虫網

螺旋橋上り見てゐる夏の海

夕焼に一条の雲染まりけり

栄吉

幼子の肩光を飛ぶ螢かな

垂れたる卵の花今日は雨なりき

風吹いて足元に散る花卵木

中腰に眺めてゐたるかたむり

兄のあとついで茅の輪をくぐりけり

撫子

朝市にならぶ目高の金盞

燕の子口いつばいの朱色かな

夏の蝶庭を巡りて飛び去りぬ

雨降つて地を覆ひたる栗の花

木道の続いてゐたり青時雨

松田裕子

読書する机に牡丹生けてあり

前山に新樹の風の吹いてをり

朝の山夏鶯の声のして

疫病の流行りし空に夏燕

打水の後に付きたる下駄の跡

宮田保江

朝の虹錦帯橋に架かりけり

植ゑし田に雨の水輪の広がりぬ

夏の灯の棚田の上の一軒家

秋刀魚焼く匂が路地に流れたる

英一

著莪の花谷からの風吹きにけり

梅雨晴間鴉しきりに鳴き交す

水溜り囲んで遊ぶ梅雨の晴

十薬の垣根を越えて隣家にも

熊谷ゆり子

舞ひながら空へ上れる蝶々かな

ビル群の映つてゐるたる植田かな

ハウスより声のしてゐる夏の朝

ばちばちと鉄を使ふ夏帽子

ちかこ

薰風やみどり児を抱く若き母

朝日さすオレンジ色のあたたかさ

実山椒筑いづばいに取りにけり

網戸入れ虫除けをして姉の家

あぢさゐの道端に咲く華やかさ

洗ひても洗ひても実山椒の香

捨て難き母晩年の夏布団

いのししが木の根っこ掘りあげた梅雨

卯の花の一枝窓にふれてをり

遠藤さつき

かこ

民

夏草の刈られし川辺犬走る

人住まぬ庭に鈴蘭広がりぬ

らつきようを漬ける手際の悪くなり

幹

水やりの夫の見てゐる花卯木

座敷より母のハミング卯の木咲く

よき風に卯の木白じら咲きにけり

みさ子

爆音の響いてゐたる梅雨曇り

坪庭に伸びてトマトの玉光る

卯の花や父の生家をなつかしみ

やす保

梅雨晴の明け方の星眺めをり

朝顔や舟で嫁入りするといふ

津田玲子